

企画展

「句碑と拓本展」

ふるさとの文学散歩



飯尾宗祇句碑

拓本

「なべて世の

風をおさめよ

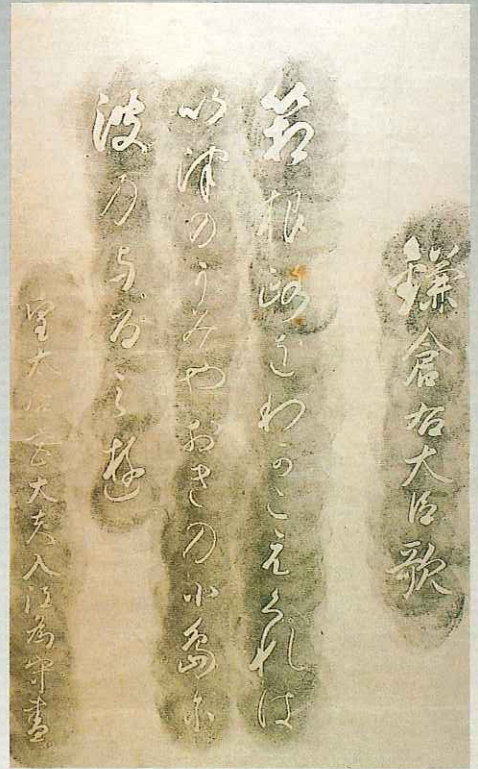
神の春

宗祇」

(裾野市

桃園

定輪寺)



源実朝歌碑

拓本(熱海市 十国峠)

「箱根路をわがこえくれば

いづのうみや おきの小島に

波のよるみゆ」

◆開催主旨◆

私たちの町三島には、箱根旧街道の路傍や清流に沿った小径、神社や寺院の境内の中などに、たくさん句碑・歌碑・文学碑などがあります。碑面には、三島とゆかりの深い俳人、歌人、文学者たちの三島に寄せるそれぞれの思いや印象が、簡潔な美しい文章で表現されています。そのような碑の前に佇み、私たちはしばしば懐かしい郷愁と味わいのある文学世界に引き込まれます。

このたびの企画展には、こうした郷土の句碑・歌碑・文学碑に魅せられて各地を巡り数多くの文学碑拓本を採り続けた宮治勲氏(沼津市出身・故人)の作品を中心として、郷土館が独自に採集した三島市内および周辺各所の拓本を合わせて展示いたしました。拓本は墨一色のモノクロ世界ではありますが、和紙の上に浮き上がった俳句・和歌、あるいは文学者たちの珠玉の文章には、屋外の碑面では味わうことの出来ない、一味違った独特の趣があります。本展示が気軽な文学散歩の場としてご利用いただき、多くのおみなさまの郷土理解の一助となれば幸いです。

三島水辺の文学碑

万葉の森文学碑

額田王の歌

「冬」もり 春さりくれば
鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ
咲かざりし 花も咲けれど
山を茂み 入りてもとらず
草ふかみ とりてもみず
秋山の この葉をみては
黄葉おは 取りてぞしのぶ
青さをば 置きてそ嘆く
そこし恨めし 秋山われは」
(昭和五十一年三月、万葉の森落成記念として楽寿園が建立)



楽寿園の文学碑

大岡 博歌碑

「波の秀に
裾洗はせて大き月
ゆらりゆらりと
遊ぶがごとし」
歌人、教育者。明治四十年
(一九〇七)〜昭和五十六年。
昭和九年「菩提樹」創刊。窪
田空穂門下として、歌に命を
懸け、清貧の生涯を送る。歌
集「溪流」「南麓」他。
(昭和六十一年十月、大岡博歌
碑建設委員会により建立)



桜川柳の道(大宮町一丁目)

(平成六年三月八日、三島ライオンズクラブにより六基建立)

正岡子規

三島の町に入れば、小川に菜を洗う女の
さまも やや なまめきて見ゆ
面白や どの橋からも 秋の不二
「旅の旅の旅」(明治二十五年作)より

明治の俳人・歌人。「ホトトギス」主宰。

明治二十五年十月中旬、帝大生子規は、箱
根山を越え、三島に入った。その旅日記よ
り「旅の旅の旅」が著された。

若山牧水

宿はづれを清らかな川が流れ、
某処の橋から富士がよく見えた。
沼津の自分の家からだ
その前山の愛鷹山が

富士の半ばを隠してゐるが、

三島に来ると愛鷹はずっと左に寄って、
富士のみがおほらかに仰がるのであつ
た。

克明に晴れた朝空に、
まったく眩いほどに その山の雪が輝い
てゐた。

「箱根と富士」(大正九年作)より

明治・大正の歌人。大正九年八月、牧水は
東京から沼津に移住した。その年の十二月
一日、箱根に遊ぶ途中、三島の町はずれか
らの富士を描写したもの。

窪田空穂

水底にしづく圓葉の青き藻を
差し射る光のさやかに照らす

歌集「卓上の灯」(昭和二十八年作)より

明治から昭和の歌人。昭和二十八年夏、沼
津市千本浜に避暑に来た折、三島の楽寿園
に立ち寄った時の作品。

太宰 治

町中を水量たっぷりの澄んだ小川が
それこそ蜘蛛の巣のやうに

縦横無尽に残る隈なく駆けめぐり、
清冽の流れの底には

水藻が青々と生えて居て、
家々の庭先を流れ、縁の下をくぐり、

台所の岸をちやぶちやぶ洗い流れて、
三島の人は、台所に坐ったままで

清潔なお洗濯が出来るのでした。

「老ハイデルベルヒ」(昭和十五年発
表)より

小説家。昭和九年夏、親友坂部武郎氏を頼
って、三島の泉町に滞在。この夏の体験が
「ロマネスク」「老ハイデルベルヒ」「満
顔」などの小品に結実し、高い評価を受け
た。

穂積 忠

町なかに 富士の地下水 湧きわきて
冬のあたたかに こむる水籠

歌集「叢」(昭和三十年刊)より

伊豆の代表的歌人。北原白秋、折口信夫に
師事。大仁町出身。戦後、三島南高の名物
校長で暮らすが多い。歌集「雪祭」「叢」。

井上 靖

三島町へ行くと

道の両側に店舗が立ちならび、
町の中央には映画の常設館があつて、

その前には幡旗が何本かはためいていた。
私たち山村の少年たちは、
ひとかたまりになり、
身を擦り合わせるようにつつま合つて、
賑やかな通りを歩いた。

「少年」(昭和二十九年発表)より

小説家。少年時代、湯ヶ島の田舎で過し
た靖少年が、三島の町へ出る機会があると
さらびやかな町の様子にとまどつた様子が
著されている。





雨乞燈籠(六花庵乙見 句)
賀茂川神社(加茂川町)

「夕立や
我が田舎では
なけれど」と

江戸時代からの「雨乞燈籠」は三嶋大社、社家村と変遷し、昭和の初め賀茂川神社に遷された。しかし、本殿を移転した昭和四十六・七年頃、行方不明となった。
(昭和五十七年、倉島氏の寄贈)



瀧之本連水句碑
「富士のふもと
廻り尽きまで
老いにけり」

伊豆佐野の俳人・教育者。本名・勝保猶右衛門。「俳閑」の額を掲げ、多くの門人を育てた。句集「雲霧集」。天保六〜明治三二(昭和五年、三十三回忌記念として、門下により佐野見目神社に建立。平成六年六月、富士の見える現在地に移転)



小出正吾文学碑
竹林寺小路(中央町)
「子どもには
子どもの世界
がある」

童話作家。明治三十年〜平成二年。童話「のろまなローラー」「太あ坊」「ジントの音」等数々の名作を書いた。碑文は自ら選んだもので、平成五年二月、生誕の地にこれを建てる。



杉田呑山漢詩碑
「三島竹支」
愛染の滝(一番町)
本名・杉田六江。安政元(一八五四)〜昭和二十年。昭和初期三島に滞在した文人。漢詩、日本画、茶道、造園、建築に造詣深く、三島の文化人に慕われた。この碑の下に翁の漢詩集「三島竹枝」が納めてある。
(昭和十八年、門人達の三島吟社会員により建立)



公孫樹碑
北中門前(文教町二丁目)
「公孫樹碑
若人の学びの道に
立ち並び 朝に夕べに
見守るはいちようの老樹
緑濃き樹かげを歩み
金色の落葉を踏み
往きかよう道のかなたに
空高く不二は輝く
幸あれや若き人びと
光あれ明日の世界に」
小出正吾 詞
(昭和四十二年十一月、在郷軍人会他により建立)



戸羽山瀬句碑
「石打って
晩鐘ひびけ 雁わたる
碧雲山人」
常林寺(本町)
本名・鈴木良雄。のち藤池に改姓。
明治四十二(一九〇七)〜昭和六十二年。郷土史研究者。著書に「江川坦庵全集他多数俳誌「湧水」主宰。碧雲子 碧山人等と号す。
(平成五年七月、藤池弘久氏により建立)

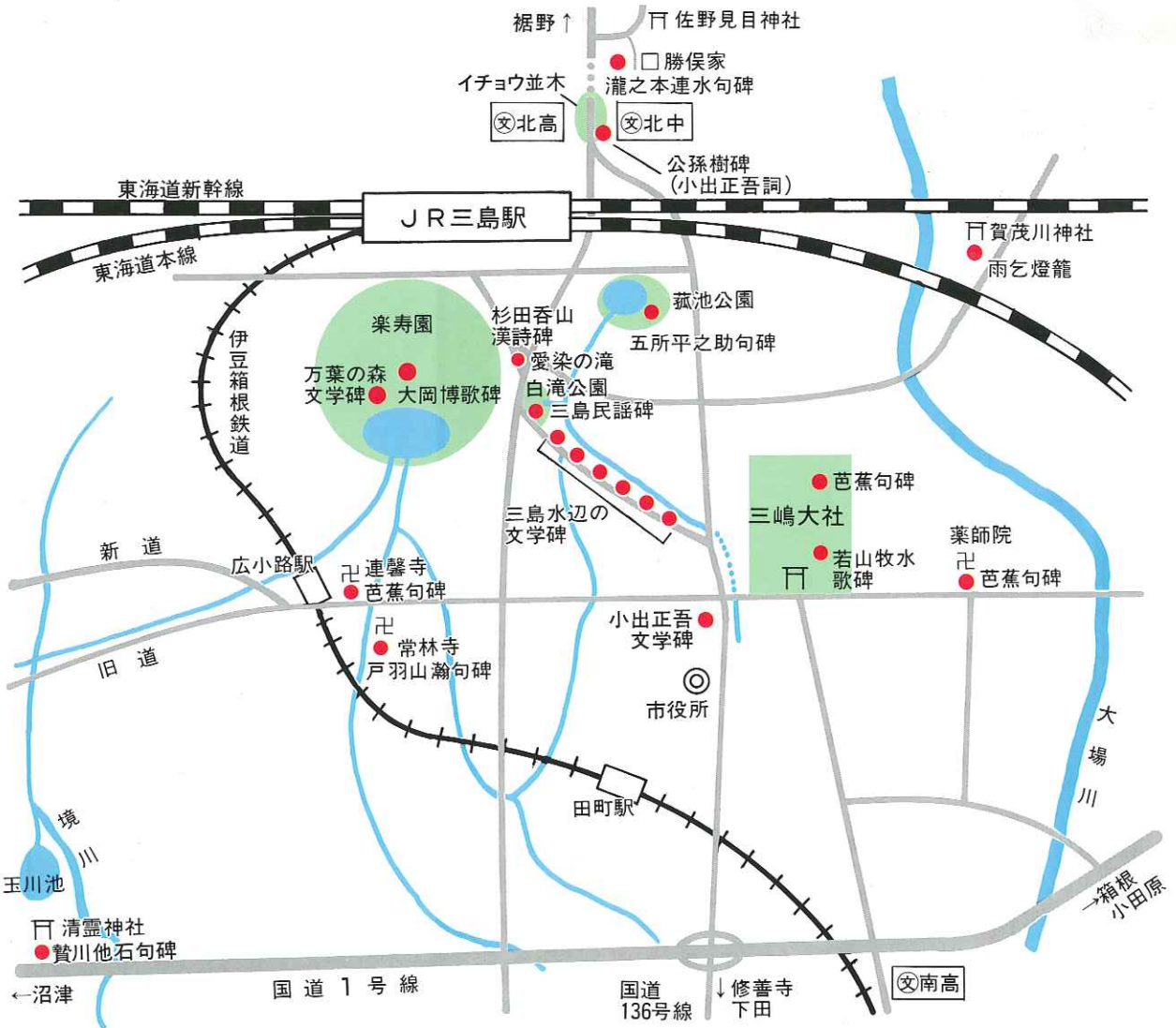


贄川他石句碑
清靈神社(清水町玉川)
「朝夕に
見馴れて高し
富士の山」
本名・贄川邦作。明治元(一八八八)〜昭和十年。俳人、政治家、実業家。三島を中心とした伊豆の俳諧の宗匠として多くの門人を育てる。「校訂芭蕉全集」、「六花庵三代、俳諧鳴鶴集編集、句集「水のひびき」。
(昭和二十五年、門人三島湧水会により建立)



三島民謡碑
白滝公園(一番町)
「富士の白雪朝日に溶て
三島女唄衆の化粧水」
(昭和七年十月、三島水明会により建立)

三島の文学碑地図



五所平之助句碑

孤池公園（大宮町三丁目）

「合掌す

三島 ざくらの満ち 咲けば」

映画監督。代表作「伊豆の踊り子」「五重塔」「たけくらべ」など。この句は句集「わが旅路」より。太平洋戦争中、三島に疎開し、定住する。伊豆を愛し花を愛した人であった。
（昭和五十八年五月、五所平之助先生を偲ぶ会により建立）



若山牧水歌碑

三嶋大社境内

「のずゑなる三島のまちのあげ花火
月夜のそらに散りて消ゆなり」

若山牧水は九州宮崎県に生まれ、大正九年（一九二〇）三島市の西隣りの沼津市香貫に住み、八月十五日に行なわれた三嶋大社夏まつりの花火を見て、この歌をつくった。
（昭和三十四年十二月、三島民報社により建立）

芦ノ湖

芦の湖カントリー
箱根峠

接待茶屋
山中一里塚

旧東海道

山中城
山中新田

富士見平ドライブイン
芭蕉句碑

国道1号線

菅原新田
菅原一里塚
大曲
恵明学園

三ツ谷新田

市ノ山新田

塚原新田
錦田一里塚
初音ヶ原松並木

錦田一里塚
鈴木宗忠老師

「日、うら、
歩、道場の
一里塚
龍心鏡」

沢地の名刹、龍沢寺(臨
済宗妙心寺派)の老師。

平和の碑
(昭和天皇歌)
願成寺

三嶋大社

大場川

国道1号線

東海道本線



施行平 東山魁夷
「青山 緑水」
日本画家。二十年以上
前、箱根から三島へ下
った時、丘の麦畑を写
生し、「麦秋の丘」を描
く。



茨ヶ平 井上 靖
「北斗 蘭干」
小説家。天城湯ヶ島
町出身。中学時代、
一年間三嶋大社前の
叔母の家から通学し
た。「しろばんば」「夏
草冬澗」等に当時の
三島の様子が描かれ
ている。



山中城岱崎出丸下
司馬遼太郎
「幾億の登音が
坂に積もり
吐く息が
谷を埋める
わが箱根にこそ」
小説家。氏の作品
「箱根の坂」は、戦
国時代の英雄、北条
早雲の物語。



菅原一里塚
大岡 信
「森の径を 背に
此の径をゆく
次なる道に
出合うため」
詩人・文芸評論家。
三島市出身。水量豊
かな三島の水辺で
少年時代を過ごし
た。父は歌人大岡
博氏。



小出 正吾 文学碑
恵明学園(菅原新田)
「子ども
には
子どもの
世界が
ある」
(昭和六十二年五月
静岡恵明学園建立)

オーブロード箱根八里記念碑
(昭和六十年、三島青年会議所・小田原
青年会議所により、一里ごとに八基建立、
三基は箱根町にある)

三島の芭蕉句碑



蓮馨寺（広小路町）

「いさともに 穂麦」

くらはん 草枕

蓮馨寺には「芭蕉老翁墓」と彫られた碑が立ち、芭蕉の遺髪を埋葬したと伝えられる。この句はその左側面に彫られたもの。「野晒紀行」に伊豆国蛭ヶ小島（葦山町）の桑門（僧侶）と尾張国まで同行し、交わした句と記されている。（六花庵乙児の高弟官鼠が芭蕉供養のため、安永七年（一七七八）十月に建立）



薬師院（大社町）

「けふ彼岸」

菩提の種を

蒔く日かな

薬師院の前住職故杉浦秀光師が本堂の建立の後、その脇にこの芭蕉の句碑を建てられた。「彼岸」は先祖を弔うのみでなく、菩提心―仏教の心を育む日…とは師の言葉という。

（昭和五十一年建立）



三嶋大社境内

「どむみりと

あふちや雨の

花曇」

棟とはせんだんの事。元禄七年江戸を立ち、上野に向う旅の途中の五月十四日（新暦六月五日）、三嶋明神（三嶋大社）に詣でた時の句。雨空に神池の辺りせんだんの巨木の梢に開く薄紫色の花を仰ぎ、江戸に残してきた病妻「すて」のことを思い、詠まれたと言われている。

（昭和五十三年六月 三嶋大社関係者により建立）



富士見平

ドライブイン前

（山中新田）

「霧しくれ

富士を見ぬ日ぞ

面白き」

芭蕉は貞享元年（一六八四）八月江戸を出発、東海道を郷里伊賀上野に帰る。この途中、箱根で霧の中の句といわれる。

（昭和五十三年八月建立）



表紙解説

源実朝歌碑 (熱海市十国峠)

鎌倉石大臣歌

「箱根路を

わがこえくれば

いづのうみや

おきの小島に

波のよるみゆ」

皇太后宮大夫

入江為守書



鎌倉幕府三代将軍源実朝(一一九二―一二一九)は、悲劇の将軍として知られるが、文学的才能に恵まれ「金槐和歌集」を残している。この歌は、二所詣(箱根権現(箱根神社)と伊豆山(現熱海市)への途中、十国峠に至った時の歌といわれる。ここより、伊豆半島、相模湾、初島など一望の基に見渡すことが出来、素直な感動が伝わってくる。

(昭和七年七月、藤原銀次郎により建立)

飯尾宗祇句碑 (裾野市 桃園 定輪寺)

「なべて世の

風をおさめよ

神の春

宗祇」

定輪寺は、室町時代の連歌師宗祇が埋葬された寺。この句は、文明三年(一四七二)三島滞陣中の東常縁から古今伝授を受けた時、その一子の病氣平癒を願って三嶋大社に奉納した「独吟法楽三島千句」の発句。戦乱の世を治めよという意気を感じられる。

(昭和二十九年建立)



松尾芭蕉句碑拓本



沼津市平町 日枝神社

「長月の末都を立て初冬の

みそちかきほど

沼津に至る。

旅館のあるじ

所望によりて

風流捨てがたく

筆を走らす

都出て

神も旅寝の日数哉

はせを」

(芭蕉来沼三百年を記念し、
双葉俳句会他により、
昭和六十二年建立)



沼津市木負 相磯家

「富士眺堂

雲霧の暫時百景をつくしけり

芭蕉」

(明治初期相磯家により建立)

採拓者 宮治 勲氏略歴

明治四二年七月二八日、愛知県岡崎市に生まれる。名古屋で小学校時代を過ごし、後沼津市に移る。
大正十二年、沼津中学校(現在の県立沼津東高校)卒業。
名古屋大学医学部に入学し、医師免許を取得。
昭和二十四年、沼津市に医院開業。
昭和四十二年頃より沼津市立駿河図書館に通い古文書の勉強を始める。
昭和四十八年頃、三島市郷土館の古文書読習会に入り、郷土史および古文書の勉強に更に深く関心を抱くようになる。
六十才を過ぎた頃から、拓本を採ることに関心を持ち、郷土周辺を始め全国各地を旅行して拓本の採集を始める。
数多くの句碑のなかでも特に芭蕉の俳句を好み、青森県をはじめ全国各地の芭蕉句碑の拓本を採る。
平成五年五月七日、八十三才の生涯を終える。

展示品目録(宮治 勲 氏 作品)

| 句碑・歌碑 | 碑 文 | 所在地 | 建碑年 |
|-----------|--|---|--|
| 1 松尾芭蕉句碑 | いざともに穂麦くらはん草枕 | 三島市広小路町 蓮馨寺 | 安永七年 |
| 2 瀧之本連水句碑 | 富士のふもと廻り尽きて老いにけり | 三島市佐野 勝保家門前 | 昭和五年 |
| 3 松尾芭蕉句碑 | 都出て神も旅寝の目数哉 | 沼津市平町 日枝神社 | 昭和六十二年 |
| 4 松尾芭蕉句碑 | 雲霧の暫時百景をつくしけり | 沼津市木負 相磯家内 | 明治初期 |
| 5 源実朝歌碑 | 箱根路をわがこえくればいづのうみや おきの小島に波のよるみゆ なべて世の風をおさめよ神の春 梅が香にのつと旭の出る山路かな 目にかゝる時やことさら五月不尽 霧時雨 富士をみぬ日ぞおもしろき 山路きてなにやらゆかしすみれ草 はつきりと有明残の桜かな 春もや、気色と、のふ月と梅 つけすてし野火のけぶりあかあかと みえゆくころぞ山はかなしき 浜ゆふの襟もと寒し茶のはをり ひと尾根はしぐるる雲か不二の雪 御命講や油のやうな酒五升 雲霧の暫時百景をつくしけり 梅若菜まりこの宿のころ、汁 世にさかる花にも念仏申しけり やはらかにたけよことしの手作麦 | 熱海市十国峠 裾野市千福 定輪寺 御殿場市 宝珠院 駿東郡小山町足柄峠 田方郡大仁町 菊池家内 田方郡中伊豆町 白岩天神 田方郡中伊豆町 妙泉寺 田方郡中伊豆町 杉本宅 | 昭和七年 昭和二十七年 昭和二十七年 嘉永七年 安政五年 元治元年 明治三十四年 |
| 6 飯尾宗祇句碑 | | 伊東市玖須美 物見塚公園 | 昭和六年 |
| 7 松尾芭蕉句碑 | | 賀茂郡松崎町外部 | |
| 8 松尾芭蕉句碑 | | 富士市 文化センター | 文化十四年 |
| 9 松尾芭蕉句碑 | | 富士市吉原 カンカン堂 | 文政九年 |
| 10 松尾芭蕉句碑 | | 清水市 鉄舟寺 | 天保十年 |
| 11 山本荷兮句碑 | | 静岡市丸子 | 文化十一年 |
| 12 松尾芭蕉句碑 | | 静岡市瀬名 光鏡院 | 寛政十年 |
| 13 尾上紫舟歌碑 | | 島田市本町三丁目 | 昭和三十八年 |
| 14 葛飾素丸句碑 | | 島田市 大井川公園 | 昭和三年 |
| 15 松尾芭蕉句碑 | | 榛原郡金谷町 長光寺 | 昭和三十一年 |
| 16 松尾芭蕉句碑 | | 神奈川県足柄下郡箱根町 早雲寺 | |
| 17 松尾芭蕉句碑 | | 愛知県岡崎市 藤川十王堂 | 寛政五年 |
| 18 松尾芭蕉句碑 | | 長野県長野市 善光寺 裏山 往生寺 | |
| 19 松尾芭蕉句碑 | | 長野県長野市 善光寺 裏山 往生寺 | |
| 20 松尾芭蕉句碑 | | 長野県木曾郡木曾福島町 | 宝曆十一年 |
| 21 松尾芭蕉句碑 | | 青森県弘前市 感応寺 | 文化四年 |
| 22 松尾芭蕉句碑 | | 青森県黒石市 保福寺 | 元禄四年 |
| 23 飯尾宗祇句碑 | | | |
| 24 松尾芭蕉句碑 | | | |
| 25 松尾芭蕉句碑 | | | |
| 26 松尾芭蕉句碑 | | | |
| 27 松尾芭蕉句碑 | | | |
| 28 松尾芭蕉句碑 | | | |

●参考文献

- 『三島文学散歩』
- 『三島いまむかし』 3
- 『静岡県の文学碑』
- 『定本 東海道文学散歩』 伊豆編
- 『定本 東海道文学散歩』 駿河・遠江編
- 『句集 春雷』
- 『伊豆の文学』
- 『静岡県 万葉句碑を歩く』
- 『岳南地区の文学碑』
- 『静岡県の文学碑一覧』
- 『日本古典文学大系46『芭蕉文集』
- 『オープンロード箱根八里』
- 『三島市誌』 下巻

中尾 勇 著
秋津 亘 著
岡田 英雄 著
南 信一 著
南 信一 著
戸羽山 瀚 著
勝呂 弘 著
静岡新聞社
富士市立博物館
駿府博物館
岩波書店刊行
三島青年会議所

●出品協力者

宮治 勲 氏 沼津市
孚美子 氏 〃
檜島 光春 氏 〃
安藤 尊夫 氏 田方郡葦山町
杉村 恒夫 氏 〃
瀬川 到 氏 三島市

三島市内の句碑他の採拓にあたり、関係者の皆様が快くご協力下さいました。又、この他に多くの皆様より文学碑に関するご教示をいただきました。紙面をもって、お礼申しあげます。

企画展「句碑と拓本」

ふるさとの文学散歩・宮治勲氏作品を中心に～平成6年7月17日～9月11日(月曜日休館)

三島市郷土館

三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL0559-71-8228 FAX0559-81-3730